

# 太湖の畔から

財団法人 リバーフロント 整備センター 研究第2部次長  
関 正和

昨年の10月、私は国際協力事業団の専門家として、中国の江南地方を訪れた。北に長江（揚子江）が東流し、河口右岸に上海、その約100km西に太湖が広がり、太湖東岸に蘇州と無錫が位置する。この地域の地図を一見すればわかるように、市内と郊外を問わず全域にわたって河川・運河・水路が網の目のように走り、湖沼が宝石箱をひっくり返したように無数に点在する水郷地帯である。

春秋時代に建設された呉の国の都蘇州は、周辺河川網の水を引き、縦横に運河を掘って水路が主、道路が副の交通システムを形成し、「水と陸とが隣し、河と道とが平行する」美しいまちなみを構成している。水路の多くは幅6～8m、平行する街路も幅約5m、両側の家は2階建てと極めて親しみやすいスケールである。水路は垂直に護岸を立てて空間の有効利用をはかりつつ、随所に階段護岸やテラス、

船着場を設け、炊事・洗濯・皿洗い等に供されている。沿岸の家並は水路に沿って一直線にはそろえず、相互に凹凸させ、屋根の高さもさまざまであり、リズム感に富んでいるが、屋根の勾配は整い、色調も屋根は黒瓦、壁は白を基調としており統一感も備えている。水辺の柳、アーチ型の石橋、すべてが絵になる風景である。整然とした中にも遊びがあり、統一の中にも変化に富むというまちづくりが行われているのである。

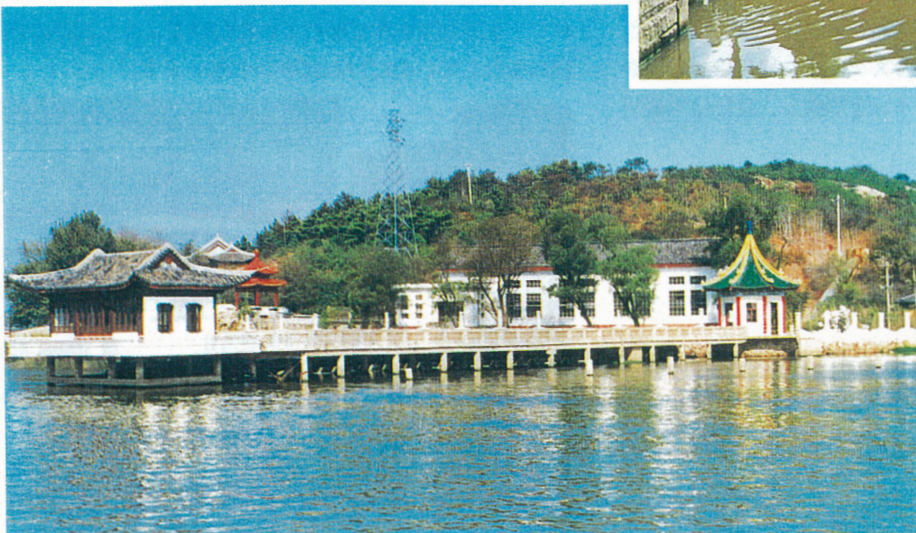
まちは八つの水門陸門をもつ城壁によって四周を囲まれ、その外側に大きな濠をめぐらすことにより、外敵からも、太湖の氾濫水からも防御されている。蘇州市の水路群も御多聞にもれず、人口の過密とモータリゼーションの進展により埋め立ての憂き目にあっていたが、国の歴史文化名都と指定され、重要観光都市でもあることから、すでに埋め



太湖を中心とする江南地方



蘇州の虎丘の前の水路で洗濯し、やすらく人びと



無錫の太湖畔にある美観に配慮した梅園上水道取水塔



立てられた水路をもう一度掘り返し、水路網を40km以上に延長し、排水を改良し、舟運と景観の復元に役立てることとしている。

秦の時代から建設が進められた北京と杭州を結ぶ京杭大運河は蘇州ではその西郊を南北に通っているが、無錫では市街地の東部を旧運河、西部を1984年に開削した延長4,140mの新運河が貫流し、コンクリート製の船がいかがいしく行き来している。太湖流域の輸送シェアは運河6割、鉄道3割、自動車1割、まさに南船北馬であり、新たな運河建設の需要も大きい。運河は、輸送路であると同時に、日常の洗濯・食器洗いの場であり、憩いの場でもある。しかしまた、オープンの下水路でもあり、水質は著しく悪い。直立護岸と水質の悪さにもかかわらず、水辺がいかにも親しげで懐しさを感じるのは、圧倒的なボリュームの緑が両

岸に植えられ、水辺に降りる多くの階段やテラスに人々が佇み、家々が水辺を意識しているためであろうか。

蘇州では埋め立てられた水路を掘り返し、無錫では新運河を開削したが、農村部においても水面を保全し、これを拡大しようという動きが出ている。太湖の流域には扞田とよばれる干拓地が多く、開放後も干拓が太湖やその周辺の湖で進められてきたが、治水をはじめとする水面保全の必要性が認識され、太湖の北東、虞山のふもとの尚湖や太湖の南東の石湖においては干拓地を掘削して湖に戻す努力が進められている。年に米を2回収穫でき、裏作もできる人口稠密地帯の肥沃な農地を湖に戻そうという決意のほどはいかばかりのものであったか。まさに「過ちてはすなわち改むるに憚ることなかれ」を勇気をもって実行しているのである。



無錫の運河沿いには圧倒的な緑と階段護岸が配されている。



東洞庭山の近くの扞田を守る堤防と富裕な農家「万元戸」